国際貢献のために

世界の子どもにワクチンを
日本委員会の事務局として

常務理事・事務局長　大石倫義氏
（S45年卒）

ミャンマー保健省で

私は現在、認定NPO「世界の子どもにワクチンを日本委員会（JCV）」（以下、JCVという）で、働いています。

このNPOは、名前の通り、世界の子どもがワクチン接種を受けられるよう、募金をして資金提供をする国際支援団体です。

静岡商業を卒業してすぐ、富士ゼロックス（株）に入社しましたから42年のビジネスマン生活を経て、昨年の3月に定年を迎えました。まだまだ働けると思っていたところに、知り合いから「NPOの事務局長の職があるが、そこで働かないか」と誘いの声が掛かり、定年再雇用の契約を途中で解除して、この団体に入ったという訳です。私に声が掛かった理由は、長い話になるのですが、1995年ごろ、富士ゼロックス（株）で社員によるボランティア組織の代表をしていた時に、「スペシャルオリンピックス」の活動を支援してくれるよう、細川佳代子さん（細川護熙首相の夫人）が要請に来たのです。

そのボランティア組織では「自然環境保護」「社会福祉」「文化教育」「国際交流」等の分野で活動している団体に寄付をしていたのですが、その時の話から「スペシャル・オリンピックス」の活動支援が始まり、今でも富士ゼロックス（株）は会社をあげて支援を続けています。簡単に言うと、その時の縁があって、私に声がかかったと言うことです。

世界には、ワクチンの接種が受けられないために、ポリオ・百日咳・ジフテリア・はしか・破傷風などの感染症にかかって命を落とす子どもがたくさん居ます。1993年に京都で開催された「子どもワクチン世界会議」では、そういう子どもが1日に8千人も居ると報告され、事態を改善するために、「先進国は民間で募金を集め、途上国を支援する」ことが決議されました。

その会議に出席していた細川佳代子が日本での組織立上げを引き受け、1994年に設立されたのです。今でも、感染症にかかって命を落とす子どもが、世界で1日に4100人も居ます。ワクチンさえあれば、命を落とさなくてもすむので、JCVでは日本で募金活動を行って、「ワクチン」「ワクチンの冷蔵施設」「ワクチンの運搬器具」等の資金を提供しています。

ワクチンを一度接種すれば、一生その病気には掛かりませんが、毎年生まれる子供たちには、接種し続けなければならず、接種資金は毎年必要なのです。JCVは、その資金を継続的に提供しているのです。昨年は、支援国におけるワクチン接種の実態やワクチン機材の配備を視察するため、十月にミャンマー、十一月にブータンに行ってきました。各国では保健省の大臣と会うことができ、「継続的に支援を得て、本当に感謝している」と、直接感謝の言葉をいただきました。

募金は色々な形でJCVに届きます。以前は、テレホンカードや書き損じはがきがたくさん送られてきて、それをお金に換えていました。ダイヤルQ2も使われましたが、今は個人と企業からの直接寄付が非常に多くなりました。それは、皆さんも覚えているかと思いますが、2005年のAC広告で始まった「僕のルール」（ソフトバンクHawksの和田投手による、一球投げる毎に十人分のワクチンを贈る、というルール）が個人や法人に広く受入れられたからです。

僕のルールは「ビールを一杯飲んだら、○円」「お客さんが包装を省略してくれたら、○円」「生命保険の契約が成立したら、○円」「同窓会に参加できたことを喜び、会費から一人○円を寄付します」と、自分の生活や仕事と一体になった寄付のルールに成長していって、今でも新たな僕のルールが作られ、JCVに登録されています。ミャンマー、ブータン以外にも、ラオス、バヌアツ、ソマリア、マダガスカルに視察に行く予定がありますが、日本と比較すると経済的な豊かさは大きな差がありますが、文化的な背景の違いからか、精神的な豊かさは逆に感ずることが有ります。

いずれにしても、やりがいの有る仕事に就けて本当に良かったと思っています。

皆さんも、「ご自身の寄付のルール」を作って、是非国際貢献に参加してください。

↑ ブータン保健省で
ポリオワクチンを接種する大石さん ↓

球を知り尽くしている』とありました。

Q：S5年創立の名門の監督としてのプレッシャーはなかったですか？

A：プレッシャーというよりも緊張感は常にあるね。年齢的にもまだノックも出来るし　プロ入りできたのもその後の人生も中大の4年間があってこそだから、恩返ししたかった。

Q：ユニホームを着るまでの30年というブランクに不安はなかった？

A：全く感じなかった、スーツからユニホームになっただけ！社長を9年務めた経験で野球部も会社と一緒。大事なのはホウレンソウ（報告・連絡・相談）学生一人ひとりを把握し力以上のものを出せるようにしたい、結果まけたら責任はすべて監督が取る。勝ったら選手の手柄。会社と同じでしょ？

Q：秋田さんみたいな方の下で働きたかったです（笑）ところで野球以外の趣味は？

A：ゴルフかなあ！趣味とは違うけど、監督になってノックも出来ないではみっともないから身体を鍛え初め、ピーク時より8キロくらい減量した。

選手に負けたくないって闘争心もあるし、ノックもまだまだいけるよ‼

選手と一緒に寮で暮らしていて毎朝5時半に起床、散歩がてら球場まで1時間歩いてます。

＊そういえば、すっきりしてる‼歌もプロ級ですよね！

Q：5年後の自分

A：選手指導とコーチ育成にも尽力して次の世代にうまくバトンタッチできればいいな。

5年後もユニホーム着ていたいとは思う。

＊中大とは限りませんよね？

Q：静商野球部について

A：静商と静高がやはり2枚看板で活躍してほしい！そんなチームになってほしいね。

★インタビューという名の飲み会を終えて

終始、饒舌で豪快な飲みっぷりの秋田さんでしたが、周囲の人を気遣う気配りを感じ、何も考えてないよと語る眼差しに強い意志を感じました。

中大野球部は現在『実力の東都』と言われる春季リーグ戦真っ只中、沖縄興南高で甲子園春夏連覇で活躍した島袋投手も復調して上位を狙います。

静商出身の羽山君も活躍中。静商だけでなく中大も皆で応援しましょう。

改めて、人との繋がりを大事にすることが実を結ぶと感じたインタビューでした。

インタビュー
広報部会
斉藤　まり子（S48年卒）